

米沢有為会文化大学

再開第4回(通算第33回)

「満洲」と米沢有為会

— 宇佐美勝夫の役割 —

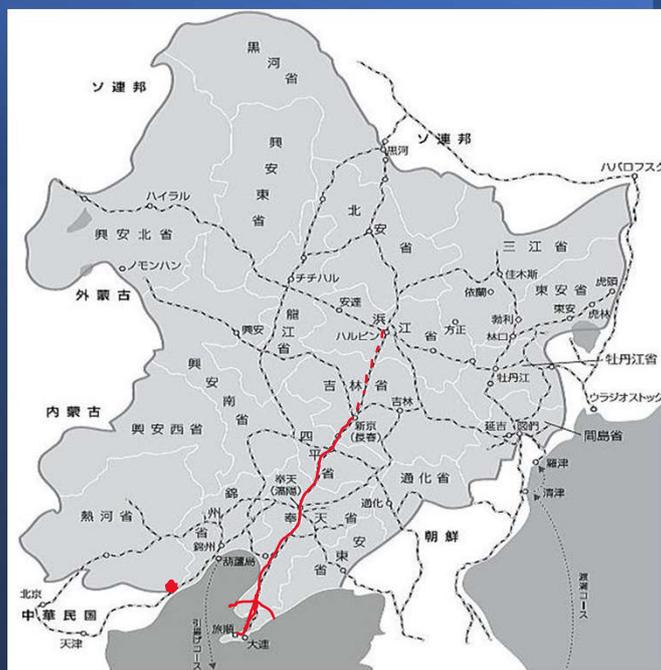
講師: 菊地隆雄

1

「満洲」と米沢有為会(及び置賜地区)との関りについて

- (1)「満洲」の都市部で生活した人々
主に米沢有為会の会員の実態を見ます。
- (2)「満洲」の奥地で生活した人々
置賜地区から移住したある「満蒙開拓団」の実態と敗戦時の
状況を扱います。
- (3)「満洲国」の中枢に関わった人
「満洲国国務顧問」であった宇佐美勝夫について、その職に就く
までのいきさつと、国務顧問としての活動や役割を国務総理
鄭孝胥の日記に基づいて見てみます。

2



3

満洲関係の主な出来事 1

明治27年（1894）8月から翌年かけて日清戦争。日清講和条約（下関条約）調印、ドイツ・フランス・ロシアによる三国干渉。遼東半島返還。

（この間、ロシアが旅順・大連の租借権と南満州鉄道の敷設権を獲得。）

明治37年（1904）2月から翌年にかけて日露戦争。日露講和条約（ポーツマス条約）調印。日本が旅順・大連の租借権、南満州鉄道（旅順～長春）とその附属地の利権（行政権と所有権）を獲得。

明治39年（1906）11月南満州鉄道株式会社（満鉄）設立。翌年4月から業務開始。満鉄は半官半民の国策会社。鉄道だけでなく、炭鉱・鉱山を有し、港湾の運営や電力供給、病院・ホテル業など、あらゆる産業を手掛け、「満鉄調査部」というシンクタンクも持つ。

明治44年（1911）10月、辛亥革命起こる。翌年宣統帝（溥儀）退位、清朝滅亡。

大正4年（1915）対華21カ条要求。旅順・大連・南満州鉄道の租借権を99年間延長すること等を要求。1919年の「五・四運動」へ繋がる。

（1917、ロシア帝国が革命によってソビエト連邦となる。）

4

満洲関係の主な出来事 2

- 昭和 3年(1928) 6・4、関東軍が張作霖爆殺事件
- 昭和 6年(1931) 9・18、関東軍が奉天郊外柳条湖の満鉄線を爆破(柳条湖事件)し、これを中国軍のしわざとして軍事行動を開始。「満洲事変」が始まり、満洲の全域に関東軍が軍を進めてゆく。
- 昭和 7年(1932) 3・1、「満洲国」建国宣言。溥儀が執政(国家元首)に就任。
「満蒙開拓団」の移民が始まる。米沢有為会満洲支部発会(4月29日)
- 昭和 8年(1933) 2・13、宇佐美勝夫任満洲国国務顧問(2月12日新京着)
2・24、国際連盟総会がリットン調査団報告書を承認し、満洲国を否定。
- 昭和 9年(1934) 3・1、「満洲国」帝政になり、溥儀が皇帝に就任。
11月宇佐美勝夫依願免満洲国国務顧問(11月6日新京出)
- 昭和10年(1935) 3・23、ソ連の北満鉄道(長春～哈爾濱の幹線及び支線)を買収。
- 昭和12年(1937) 7・7、北京郊外で日本と中国の軍隊が衝突(盧溝橋事件)、これが契機となり全面的な「日中戦争」に突入。
- 昭和13年(1938) 「満蒙開拓青少年義勇軍」の移民が始まる。
- 昭和15年(1940) 集団9次 板子房置賜郷開拓団(三江省樺川県蘇家店村板子房屯)入植
- 昭和14年(1939) 5・14、ノモンハン事件勃発。関東軍大打撃を受ける。
- 昭和17年(1942) 9・21、満鉄調査部事件。多数の調査部員が検挙された。
- 昭和20年(1945) 8・9ソ連、国境を越えて満洲に侵入。
8・15、日本敗戦
8・23、ソ連軍、満洲全域を占領。

5

昭和7年(1932)4月29日 米沢有為会満洲支部発会

(昭和14年4月14日「大連支部」と「満洲国支部」とに編成替え)

昭和7年4月 大連伏見台配水地

昭和8年4月 大連南山麓彌生ヶ池



6

米沢有為会滿洲支部 (昭和11年11月現在)

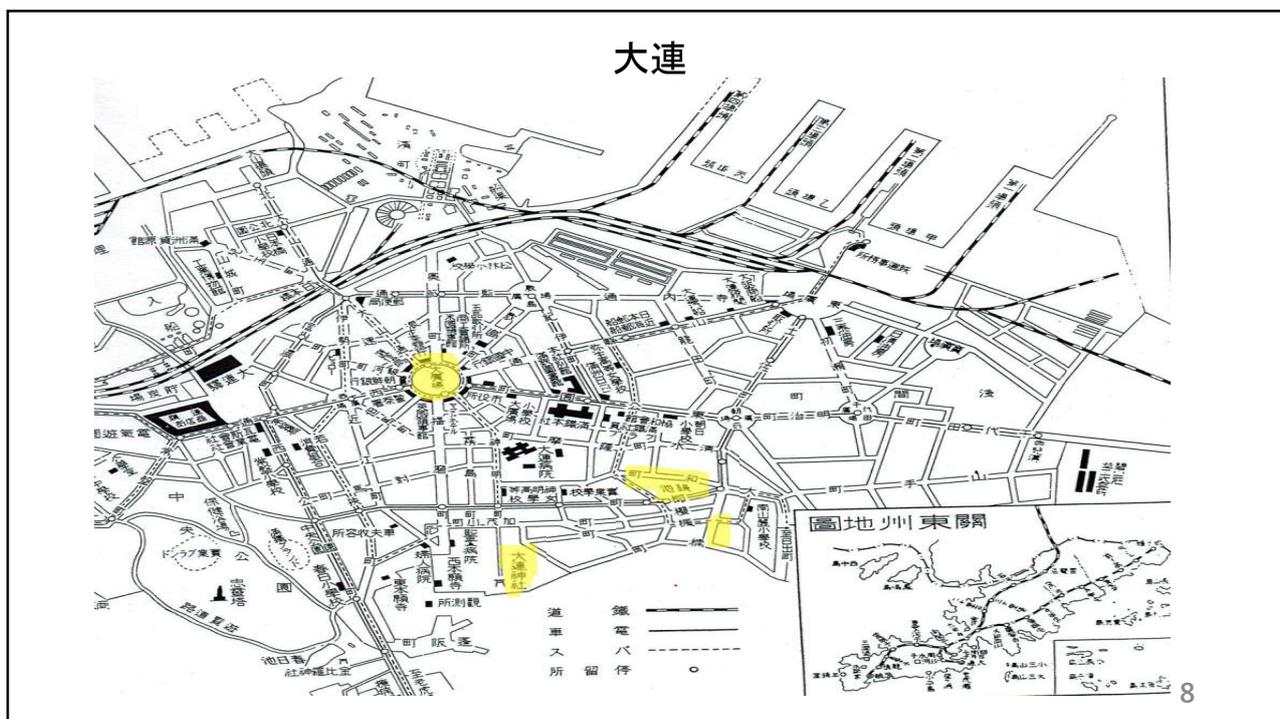
支部長：岩井勘六 (自宅事務所：大連市聖徳街1丁目1番地)

會員數：95名

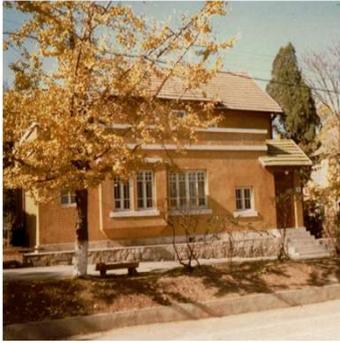
職業

- ①官吏19名・滿鐵社員17名・軍人11名
- ②教員4名・医者2名・銀行員1名・商業1名・神主1名
學生(旅順工科大学)1名
- ③會社員33名
(滿洲電業、滿洲電信電話、南滿瓦斯、國際運輸、
三井物產、三菱商事、日本航空、滿洲日報)
- ④無職5名

7



大連の日本人住宅



大連の町
(大広場の周囲)





長春（旧新京）に残る戦前の建物（1）

満洲国国務院



関東軍司令部



長春（旧新京）に残る戦前の建物（2）

満洲国中央銀行本店



満洲国総合法衙（最高裁判所・最高検察庁）



13

長春（旧新京）に残る戦前の建物（3）

満洲国交通部

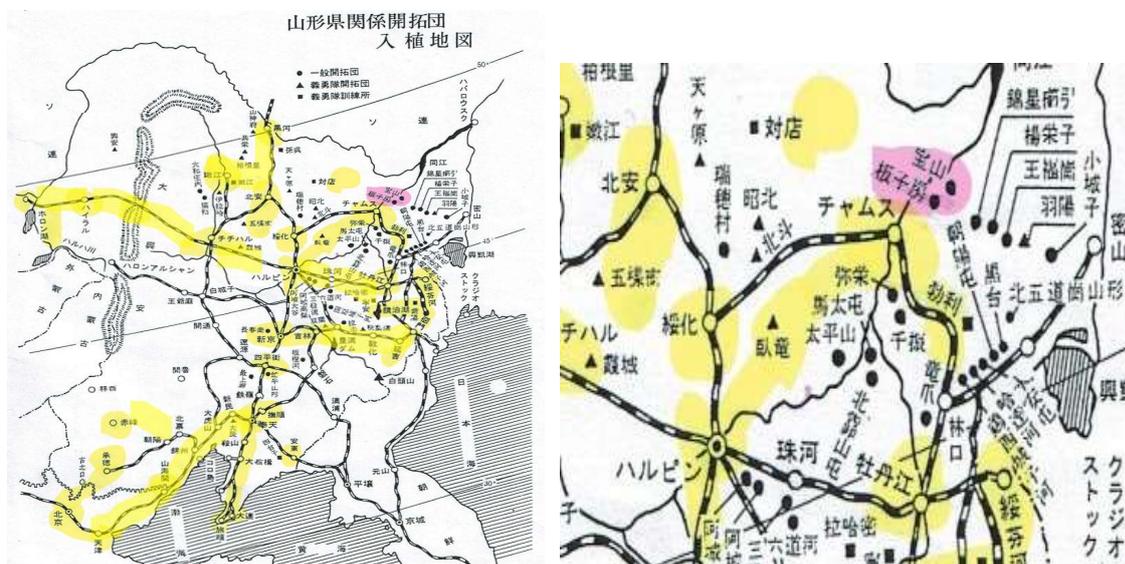


新京ヤマトホテル



14

満蒙開拓団と満蒙開拓青少年義勇軍



15

満蒙開拓団と満蒙開拓青少年義勇軍

1、山形県の開拓移民：満蒙開拓団13,252名、満蒙開拓青少年義勇軍3,925名
計17,177名（死者約7,000）

2、置賜地区の満蒙開拓団：○昭和14年・第8次 太平山開拓団 主に置賜の人で編団
○昭和15年・第9次 板子房開拓団 置賜（東置賜郡二井宿村中心の分村）
昭和19年～20年・第14次 板子房開拓団補充 米沢市と南置賜の人々

「板子房置賜郷開拓団」（三江省樺川県蘇家店村板子房屯）の終戦時の状況

○昭和20年8月9日、ソ連軍満洲に侵攻。

○8月13日、この時点で在団273名（男116、女157）、応召91名。4隊に分かれ佳木斯に向かって逃避行開始。途中襲撃を受け、第1隊は佳木斯郊外の松花江で投身自決。第2隊は本部に引き返す。第3隊は松花江鉄橋より投身自決した者や佳木斯収容所までたどり着いた者あり。第4隊は蘇家店付近に残留。

○8月18日、第2隊138名は隣団の宝山開拓団員と一緒に板子房小学校の教室3室に集結。襲撃を受け、火災になり、焼死・集団自決381名。少数者が逃れ、のちに残留孤児・残留婦人となる。

16

(集団九次) 板子房置賜郷開拓団 (三江省樺川県蘇家店村板子房屯)

板子房開拓団付近



板子房開拓団学校跡



17

板子房開拓団耕地跡



方正の日本人公墓



18

鄭孝胥（政治家、文人、書家）

1860年生まれ。福建省福州府閩県の人。

1863年進士である大叔父の鄭虞臣について科挙の準備を始める。

1866年北京に移る。

1872年『十三経』を学び終える。1876年まで鄭虞臣につく。

1882年郷試を受け、福建省第一位で合格。「拳人」となる。

1891年清国駐日大使館書記官。翌年神戸大阪総領事。

1894年日清戦争勃発により帰国。在南京。

1898年在上海。宮中に召されて「練兵策」を述べる。

（この間、安徽按察使・広東按察使などに就任）

1911年北京に行く。湖南布政使を授かる。上海の邸宅（「海蔵楼」）に隠居。

1912年清朝滅亡。

（上海商務印書館董事、上海儲蓄銀行重役などに就任）

1924年溥儀に『資治通鑑』を進講。溥儀紫禁城を退去。

1925年溥儀天津に居住。侍講を命ぜらる。

1931年11月溥儀に随行して密かに海を渡り、營口から「満洲」に入り、旅順に滞在。

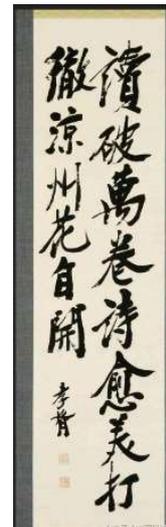
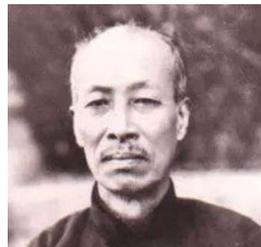
1932年3月1日「満洲国」建国。國務総理（兼軍政部総長・文教部総長）に就任。

1933年満日文化協会会長に就任。

1934年3月1日「満洲国」帝政になる。溥儀は「執政」から「皇帝」へ。

1935年5月関東軍との折り合いがつかなくなり、國務総理辞職。大連に住む。

1938年逝去。



19

○芥川龍之介の鄭孝胥評（「上海游記」）

氏は一見した所、老人に似合はず血色が好い。眼も殆青年のやうに、朗な光を帯びてゐる。殊に胸を反らせた態度や、盛な手真似(ジュスチュア)を交へる工合は、鄭垂氏よりも反つて若々しい。それが黒い馬掛兎(マアクワル)に、心もち藍の調子が勝つた、薄鼠の大掛兎(タアクワル)を着てゐる所は、さすがは当年の才人だけに、如何にも気が利いた風采である。いや、閑日月に富んだ今さへ、かう澆刺としてゐるやうぢや、康有為氏を中心とした、芝居のやうな戊戌の変に、花花しい役割を演じた頃には、どの位才気煥発だったか、想像する事も難くはない。

○松崎鶴雄の鄭孝胥評（「中国の士君子の書齋」）

鄭孝胥の新居が上海英租界に建て、あつた。鄭は最後の官が湖南省の布政使で、革命の勃発を予知して、省の銀円の五千元を一箱に詰めた木箱をいくつかと、家屬を長沙の某汽船会社に託して上海に送り、それから自身が次の便船で上海に下つて避難して、新築したのが海蔵楼である。福建派の詩人として書家として著名であつた。書の依頼が多く、いつ行つてみても二階の欄干から階下まで書が乾かしてあつた。(省略)鄭の書は隸書が最も善かつた。商務印書館の新出版の題簽や表紙の書名は多く鄭が書いた。書齋は多少の俗気があつた。彼が満洲国の総理となつてからの書齋は俗臭紛々として書も詩も大いに低下したと云ふ。

20

宇佐美勝夫

明治 2年米沢市生まれ。幼名大助

明治14年明治天皇東北巡幸。

(興讓小学校に立ち寄られた際、天皇の面前で「日本略史」松平定信の一章を朗読。)

明治16年米沢中学校入学

(米沢中学を経て、神田駿河台の成立学舎で学ぶ。)

明治21年第一高等学校入学

明治26年第一高等学校卒業、東京帝国大学法科大学政治科入学(本郷森川町空橋で伊東忠太等と共同生活。)

明治29年東京帝国大学卒業。内務省入省、県治局勤務。

明治30年徳島県参事官(有為会で歓送会。平田東助

(貴族院議員、枢密院書記官長)が激励。)
(徳島県知事山縣伊三郎の信頼を得る。)

明治32年京都府参事官

明治33年内務書記官、宗教局勤務。

明治40年大臣官房文書課長兼任内務省参事官

明治41年富山県知事

明治43年朝鮮総督府内務部長官

(統監寺内正毅、副統監山縣伊三郎)

(こののち数年、済生院長、土木局長兼任)

大正 8年朝鮮総督府内務部長官依願退職。

大正10年東京府知事(～大正14年)

(大正12年9月1日関東大震災。

帝都復興院評議員として復興に尽力。)

大正14年賞勲局総裁

昭和 2年資源局長官

昭和 6年米沢有為会会長(逝去まで)

昭和 7年維新資料編纂会委員

昭和 8年満洲国國務顧問(2月13日新京着)

(昭和9年7月貴族院議員に勅選。)

昭和 9年満洲国國務顧問依願免職(11月6日新京離)。

昭和13年国家総動員審議会委員

昭和17年12月26日逝去。



21

寺内正毅朝鮮総督に対する宇佐美勝夫朝鮮総督府内務部長官の対応

○宇佐美氏の場合は、簡単に引下らない。再考致しませうといつて案を持ち帰り、更に忠実に総督垂示の点をも検討し、時日をおいて再び之を提出する。改案も修正もしない。

「御示しにより能く研究を重ねましたが、どうも原案が宜しいようです。」と迫るが如く、促すが如く、烈しき言辭を用ひるでもなく、其の粘り方は実に他人の追隨を許さぬ概がある。それでも氏には憎めぬところがある。他人が之を真似たらば必ず逆鱗に触れたと思はれる。古人は、かういふ粘り方を、士以て弘毅ならざるべからずといつた。氏はこの弘毅を地で行く人であった。
(林市蔵「奇行といふべくば」)

○寺内総督には春風駘蕩の方面と、秋霜烈日の方面とがあつた。若し夫れ後者の場合に面した時は、人動もすれば、其威力に怖れて進言を敢てする者が少なかつた。さういふ時でも、宇佐美長官は、其叡智を以て、其忍耐を以て、よく之に即応し、余り総督の忌諱にも触れず、二回も、三回も、丁寧反覆して進言説明の勞を執られ、結局下意上達の効果を完成せずには已まれなかつた。此の手並を見て、余は常に宇佐美氏の手腕に感服した。併し、それは手腕ではない。一に誠意と、忍耐と、叡智に外ならぬのである。

(関屋貞三郎「嗚呼、尊敬すべき先輩」)

22

1、「満洲国」の政治組織と実態

- ①満洲国の政治組織は、形式的には立法(立法院)・行政(國務院)・司法(法院)・監察(監察院)の四権分立。
- ②それぞれの長は満系(中国人)、次官は日系。実際は「内面指導」と称して次官の日系官僚を通して満洲国を運営。
- ③日系の中心官僚は総務長官(のちに総務庁長)。
- ④政治組織の上に、日系官吏の任免権をも持つ関東軍司令官(在満日本大使と関東長官を兼務)があり、あらゆる重要事項は関東軍司令官の承諾なしには進められない仕組み。
- ⑤現在の中国では日本の傀儡とみなし、「偽満洲国」といって認めていない。

23

2、満洲国國務顧問について

- ①この役職に就いた人は、宇佐美勝夫(在任昭和8年2月～昭和9年11月)のみ。その前後誰もいない。
- ②職務は「國務総理大臣及び各部大臣の諮問に応じ、國務の建議に関して國務院會議及び參議府會議に出席すること。」
- ③実際の職務は、関東軍・日系官僚←→総理鄭孝胥・満系官僚・(皇帝溥儀)などの関係を調整し、日本側の意を通すこと。
- ④宇佐美勝夫は、朝鮮総督府での軍人上官対応や民衆対応、それに人柄や人徳が買われて任命されたものと思われる。
- ⑤宇佐美勝夫は日系官僚や関東軍の方針をそのまま満系の総理や官僚に押しつけるのではなく、満系の意見に耳を傾け、苦悩しながら可能な限り道理を通してゆこうとしている。この点で余人に代えがたい役割を果たしている。

24

3、鄭孝胥日記等から見た宇佐美勝夫の言動

- ①毎朝静かな時間に総理鄭孝胥の執務室を訪れ、じっくり話し合う。話題は政務の話に限らない。
- ②日系、満系を問わず、要人や官僚から常時意見を聴取している。
- ③時には自宅（公館）の狭い和室に満系大臣たちが集まって来て、酒を飲み胸襟を開いて語り合うこともある。
- ④週に一度は関東軍司令官を訪問して会談を持っている。
- ⑤国務院会議、参議院会議には出席するが、温顔をもって傾聴するのみで、発言は極めて稀。
- ⑥宇佐美は短期間で、関東軍、総務庁、鄭孝胥三者の信頼を得るようになる。鄭孝胥が関東軍司令官武藤信義に対して、総務庁長人事について名前を挙げて意見を言うと、武藤はしばし考えて、「宇佐美と相談してから」と答えるようになる。通常全権を握る関東軍司令官がこのような反応を示すことはなく、案件によっては宇佐美の存在は無視できないものとなってゆく。

25

- ⑦朝鮮総督府での旧知、遠藤柳作が総務庁長になる。遠藤柳作は宇佐美の「人物」に敬服している人であり、日系官僚トップの総務庁長の信頼を得て、これ以後の宇佐美の説得力はさらに増していく。
- ⑧軍事の件(熱河での作戦等)、予算の件、人事の件、ほとんどの重要事項は宇佐美を通して行き来する。しかし、宇佐美は間に入り、ただ意見を取り次いでいただけではない。関東軍司令官菱刈隆が鄭孝胥執務室に来て用件を告げると、宇佐美はその後やって来て「何か異議はありませんか」と聞き、細やかな配慮をする。
- ⑩帝政の儀式が迫ってくると、宇佐美は「大典の時の詔書はもっと書き込んでいただきたい。関東軍の若い参謀たちは漢文がわからないので、(定型の難解な文言だけではなく)具体的に書き込んでおいていただかないと支障が出る」と伝える。
- 鄭孝胥はまったく名目だけの総理で、関東軍や日系官僚の言いなりであったというのが定説であるが、『鄭孝胥日記』を読むと、少なくとも宇佐美勝夫が国務顧問であった時期は、秘書官が「鄭総理を輔けるのが宇佐美さんの志だった」と言うように、宇佐美の努力が功を奏し、鄭孝胥自身の意見や意思が一定程度活かされていたように思われる。

26

宇佐美勝夫が従事した主な職務

- 1、朝鮮総督府内務部長官在職 明治43年（1910）10月～大正8年（1919）8月。
日韓併合～三・一独立運動
- 2、東京府東京府知事在職 大正10年（1921）5月～大正14年（1925）9月
関東大震災(大正12年9月1日)
- 3、満洲国国務顧問在職 昭和8年（1933）2月～昭和9年（1934）11月
(1932年9月15日「日満議定書」調印。10月「リットン調査団」報告書。)
1933年3月日本は国際連盟脱退。
1934年3月1日「満洲国帝政実施」
- 4、国家総動員関係
 - 資源局長官在職 昭和2年5月～昭和8年1月
国家総動員の準備機関で、資源の統制・運用を準備。
 - 国家総動員審議会委員在職 昭和13年「国家総動員法」制定～逝去(昭和17年12月)